

鳥取市布勢

# 布勢遺跡発掘調査報告書

布勢総合運動公園整備事業に伴う  
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査

1981

財團法人 鳥取県教育文化財団

## 正 誤 表

頁・行数	誤	正
例言 6	奈良大学	元奈良教育大学
目次	第4節まとめ……59	……59
挿図・図版目次	挿図 39 ……59 〃 40 ……59 〃 41 ……59	……59 ……59 ……59
	図版 5 桧倒出土状況	杭列出土状況
	図版34 SI01・S103出土	SI01・02・03出土
	図版36 SPO02出土	SPO01・02出土
P.1 31行	松原、谷田遺跡等	松原谷田遺跡等
P.3 24・25行	北西、南西、北東、北西の	北西、南西、北東、南東の
P.31 挿図29		
P.33 32行	1に比べやや	①に比べやや
P.49	第4節まとめ	まとめ
P.52 17行	致っていない	到っていない
P.68 26行	5cmを測る	5 cmを測る
P.91 28行	調整は⑦と	調整は⑦と
図版 15	12CNW地区出土木製品	12 CNW地区出土木製品
図版 17	12CNW地出土木製品	12 CNW地区出土木製品
図版 19	下 同部分(拡大)	同部分(実大)
図版 24	顕微鏡(4)	顕微鏡写真(4)
図版 40 右下	SPO2出土	SPO02出土

## 序 文

昭和60年度の国民体育大会は、鳥取市の布勢総合運動公園が主会場となります。この場所には縄文時代の布勢第一遺跡、弥生時代の布勢第二遺跡と古墳時代の布勢古墳群があります。そこで、財団法人鳥取県教育文化財団は、「布勢総合運動公園整備計画」に伴う埋蔵文化財の発掘調査を鳥取県から委託をうけ、実施してまいりました。

発掘調査の結果、第一遺跡からは縄文時代後期の多量の土器と漆器や木器類が、第二遺跡からは弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落が出てきました。湖山池に近い丘陵の傾斜面から低地にかけて、古来から居住地として使われていたことがわかったわけです。

本書はその報告書であります。本書が郷土を理解するために、多くの方々の御活用をいただけますならば幸いであります。

この調査にあたりまして、御指導、御協力をいただいた関係各位に対し深く感謝申し上げます。

昭和56年5月30日

財団法人鳥取県教育文化財団

常務理事 平木安市

## 例　　言

1. この冊子は鳥取県都市計画課「布勢総合運動公園整備事業」に伴う布勢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は鳥取市布勢 166 番地に所在する。
3. 遺跡名は、布勢第1遺跡、第2遺跡および布勢グランド古墳群と仮称し、総称して布勢遺跡とする。
4. 調査は、財団法人鳥取県教育文化財団が鳥取県都市計画課の委託を受けて実施し、1980年6月20日から1981年3月25日までを発掘調査、1981年4月1日から同年5月30日までを整理期間とした。
5. 第1遺跡の調査において、名古屋大学文学部助教授渡辺誠氏の御指導を得るとともに、「編み物」については同大学研究生・植松なおみ氏とともに玉稿をいただいた。
6. 第1遺跡出土の木製品の材質同定を奈良大学文学部教授嶋倉己三郎氏、花粉分析を岡山理科大学理学部教授三好教大氏、種子同定を岡山大学理学部教授笠原安夫氏にお願いし、嶋倉・笠原両氏には玉稿をいただいた。
7. 縄文土器の分類は、鳥取県教育委員会文化課係長亀井熙人氏の御指導を得た。
8. 本書の執筆編集は中野知照、中村徹、津川ひとみ、坂本敬司、長岡光展、大谷増実、山根範久がこれにあたり、文責は大木に記した。
9. 本書を作成するにあたって、鳥取県教育委員会文化課係長亀井熙人氏、清水真一氏、久保穂二朗氏の御指導と御教示を得た。銘記して感謝します。
10. 調査に際し、地元松保地区の方々をはじめ、多方面からの参加、援助協力を得た。
11. 本書に使用した記号は、S I…竪穴住居跡、S B…掘立柱建物跡、S E…井戸跡、S P O…池状遺構を用いている。

### 指導・助言・協力者（順不同・敬称略）

網干善教、岡崎正雄、岡田篤正、深井明比古、水野正好、丹羽佑一、南 博史、家根祥多、豊島吉則、小谷伸男、赤木三郎、岡田昭明、山名 敏、清末忠人、小杉宗雄、平川 誠、中野知行、若林久雄、山中 保、西村彰滋、大賀靖浩、笹尾千恵子、福島慶純、景山俊邦、入川泰樹、山田宣彰、村川裕紀、野島珠美

## 調査関係者一覧

総括 平木 安市 烏取県教育文化財団常務理事  
木村 耕造 同 前常務理事  
畠田 明 同 事務局長  
太田垣甚一 東部埋蔵文化財調査事務所長  
調査指導 田中 弘道 烏取県教育委員会文化課文化財主事  
中野 知照

調査員 中村徹、津川ひとみ、坂本敬司、長岡充展、森原陽子

発掘参加者（五十音順、敬称略）

有田すぎこ、今崎彦道、今崎豊子、入江フキ、今村てつの、植田真、岡本安子、太田つな子、  
加藤千代恵、川崎きみこ、懸樋清子、勝田忍、岸本君子、北田敏宏、北脇かよ子、北脇富士枝、  
木山尚彦、桐林春野、小谷育江、小谷ふよ子、小谷辰子、小林菊子、坂本とよ、佐藤悟、  
坂本きく、竹内麗子、竹内側子、竹内秋江、田中博司、田中光子、田村フジ、田中美智枝、  
田村とよ、田賀文夫、田脇さよ子、徳田恵美子、戸田喜美枝、中島<sup>久</sup>、中嶋峰蔵、西原信男、  
西垣雅之、野村すが子、橋本一恵、浜本久子、浜本よしこ、林広子、福田菊枝、福田絹子  
福田喜代子、福田しづえ、福田未子、福田範史、福田利美枝、福田みどり、福田宗子、  
前嶋鉄市、前嶋芳子、前田浅野、前田ふさ子、宮脇君枝、村上梅治、村上君美枝、  
森喜佐雄、森岡寿子、森原ふじ子、森本すみえ、森本亨、森本篤枝、森本とめ子、  
森本みち子、森本みどり、森本美代子、森本正俊、森本善雄、山本仲藏、山本とし子、  
山本絹子、山本ふじ子、山内玲子、山根範久、吉田百合子、米沢とし子、大谷増実

# 目 次

序 文

例 言

調査関係者一欄

目 次

挿図・図版目次

## 第1章 布勢遺跡の概要と調査経過

第1節 布勢遺跡の位置と環境 ..... (1)

第2節 調査経過 ..... (3)

## 第2章 布勢第1遺跡 ..... (5)

第1節 概 要 ..... (6)

第2節 調査区内容 ..... (6)

(1) 17 A ..... (6)

(2) 15 B ..... (6)

(3) 13 B'NEIII ..... (6)

(4) 13 A NEIV ..... (6)

(5) 13 B NEIV ..... (6)

(6) 11 B'NEIII ..... (6)

(7) 9 A SEIII ..... (6)

(8) 11 A SEIII ..... (6)

(9) 8 A'NWI ..... (6)

(10) 5 A SEI ..... (9)

(11) 3 A SEIII ..... (9)

(12) 9 A'NWI ..... (9)

(13) 12 C NWI・III ..... (12)

第3節 出土遺物 ..... (15)

1. 繩文土器 ..... (15)

2. 石器・石製品 ..... (27)

3. 木製品 ..... (33)

4. 特殊製品 ..... (37)

5. 中近世の陶磁器 ..... (39)

6. 布勢遺跡出土のカゴについて	渡辺 誠・植松なおみ	69
7. 鳥取県布勢遺跡木製品の樹種	嶋倉巳三郎	42
第4節 まとめ		49
第3章 布勢グランド古墳群		
第1節 概 要		
1. 1号墳		54
2. 10号墳		54
3. 13号墳		56
4. 14号墳		56
5. 15号墳		56
6. 4・5・9号墳		57
第4章 布勢第2遺跡		
第1節 概 要		
第2節 遺 構		
1. 壑穴住居跡 (S I)		63
2. 掘立柱建物跡 (S B)		71
3. 井戸 (S E)		77
4. 池 (S P O)		77
第3節 出土遺物		
1. 分銅形土製品		83
2. 石器・石製品		84
3. 玉作工房と玉製品		88
4. 墳輪		90
5. 平安時代の土器		91
6. 中世の土器		91
7. 一石五輪塔		93
8. 人形型石製品		93
9. 木製品		94
第4節 ま と め		
附 章 鳥取市布勢遺跡の地層種子分析と出土種実の同定	笠原安夫	97

## 挿図・図版目次

### 挿図目次

挿図 1. 布勢遺跡周辺地図	(2)	" 33. 朱漆塗木器実測図	54
" 2. 烏取平野周辺の縄文時代遺跡分布図(2)		" 34. 木製品実測図2	(35・36)
" 3. 布勢遺跡配置図	(4)	" 35. 木製品実測図3	(35・36)
" 4. 布勢第1遺跡調査グリッド配置図	(5)	" 36. 特殊製品実測図	58
" 5. 布勢第1遺跡土層図	(7・8)	" 37. 中近世陶磁器実測図	58
" 6. 3ASEⅢ南断面図	(9)	" 38. カゴA実測図	61
" 7. 3ASEⅢ遺溝図	(10)	" 39. 1号墳平面実測図	54
" 8. 9ANWI遺構・断面図	(11)	" 40. 13号墳平面実測図	54
" 9. 12CNWI・Ⅲ北壁断面図	(13・14)	" 41. 10号墳平面実測図	54
" 10. 12CNWI・Ⅲ平面図	(13・14)	" 42. 14号墳平面実測図	57
" 11. 中期前葉土器実測図	(15)	" 43. 15号墳平面実測図	57
" 12. 後期初頭土器実測図	(15)	" 44. 4・5号墳丘図	57
" 13. 後期中葉 第1類土器図	(17)	" 45. 9号墳丘図	57
" 14. 後期中葉 第2類土器図	(18)	" 46. 第2遺跡旧地形図	58
" 15. 後期中葉 第3類土器図	(19)	" 47. 第2遺跡土層図	(59・60)
" 16. 後期中葉 第4類土器図	(20)	" 48. 第2遺跡全体遺構図	(59・60)
" 17. 後期中葉 第5類土器図	(21)	" 49. SI01遺構図	58
" 18. 後期中葉 第6類土器図	(21)	" 50. SI01遺物実測図	58
" 19. 後期中葉 粗成土器図1	(22)	" 51. SI02遺構図	58
" 20. 後期中葉 粗成土器図2	(23)	" 52. SI02遺物実測図	58
" 21. 土器底部図1	(24)	" 53. SI03遺構図	58
" 22. 土器底部図2	(25)	" 54. SI03遺物実測図	58
" 23. 土器底部図3	(25)	" 55. SI04遺構図	58
" 24. その他の土器図	(26)	" 56. SI04遺物実測図	58
" 25. 石錐重量分布棒グラフ図	(29)	" 57. SI05遺構図	58
" 26. 右鍾分類図	(29)	" 58. SI05遺物実測図	58
" 27. 散き石・すり石・石皿実測図	(30)	" 59. SI06・07遺構図	58
" 28. 打製・磨製石斧実測図	(31)	" 60. SI06遺物実測図	58
" 29. 石鎚・砥石状磨製石器実測図	(31)	" 61. SI08遺構図	58
" 30. 石錐実測図	(32)	" 62. SB01・02遺構図	72
" 31. 木製品実測図1	(34)	" 63. SB01・02遺物実測図	73
" 32. 腕輪実測図	(34)	" 64. SB03遺構図	73

〃	65. SB03遺物実測図	73
〃	66. SB04遺構・遺物実測図	74
〃	67. SB05遺構図	75
〃	68. SB06遺構図	76
〃	69. SE01遺構・遺物実測図	77
〃	70. SPO01遺構図	78
〃	71. SPO01遺物実測図	78
〃	72. SPO02遺構図	79
〃	73. SPO02遺物実測図	80
〃	74. SPO02遺構平・断面図	(81・82)
〃	75. SPO02杭実測図	(81・82)
〃	76. 分銅形土製品実測図	83
〃	77. 石庖丁・打製石斧・磨製石斧実測図	84
〃	78. 磚石・敲石・すり石・石皿・石鍤実測図	85
〃	79. 石鐵・石匙実測図	86
〃	80. 管玉未製品実測図	88
〃	81. 原石・玉砾石実測図	89
〃	82. 勾玉実測図	90
〃	83. 管玉実測図	91
〃	84. 墓輪実測図	92
〃	85. 平安時代の土器実測図	93
〃	86. 中世土器実測図	94
〃	87. 一石五輪塔実測図	95
〃	88. 人形型石製品実測図	96
〃	89. 第2遺跡出土木製品実測図	97
〃	90. 第2遺跡出土土器拓本	98

## 図版目次

図版	1. 遺跡周辺の航空写真	
〃	2. 第1遺跡全景・作業風景	
〃	3. 15B・17A・11ASEI断面図・9ANW I石皿 出土状況・9ANW I遺構図	
〃	4. 5ASEI遺物出土状況・5ASEI土器出土 状況・3ASEII炉跡・3ASEII遺構図	
〃	5. 12CNWI遺構図・12CNWI杭出土状況・ 12CNWI・漆塗木器出土状況図・12CNWI 杭例出土状況	
〃	6. 繩文土器 9ANW I・12CNWI	
〃	7. " 後期中葉第1類・第2類	
〃	8. " 後期中葉第3類・第4類・第6類	
〃	9. " 後期中葉第5類・粗成土器	
〃	10. " 後期中葉粗成土器	
〃	11. " 土器底部	
〃	12. " 土器底部・その他の土器	
〃	13. 敲石・磨石・石皿・打製石斧・磨製石 斧・乳棒状石斧	
〃	14. 石鐵・砥石状磨製石器・石鍤	
〃	15. 12CNW地区出土木製品	
〃	16. 12CNW地区出土木製品・柵	
〃	17. 12CNW地区出土木製品	
〃	18. 土製品・特殊製品・乗籠土製品・中近 世陶磁器	
〃	19. カゴA	
〃	20. カゴB・編物断片	
〃	21. 木製品樹種・顕微鏡写真(1)	
〃	22. "	(2)
〃	23. "	(3)
〃	24. "	(4)
〃	25. "	(5)
〃	26. 古墳群	
〃	27. 第2遺跡全景調査前・調査後	
〃	28. SI01・SI02遺構	
〃	29. SI03・04遺構・SI04遺物出土状 況・SI06・SI08遺構	
〃	30. SB01・02遺構	
〃	31. SB03・04・05・06遺構・SB05出土柱	
〃	32. SE01・SPO01・SPO02遺構	
〃	33. 遺物出土状況	
〃	34. SI01・SI03出土遺物	
〃	35. SI04・05・06出土遺物	
〃	36. SB01・02・03出土遺物・SPO02出土 遺物	
〃	37. 第2遺跡出土石製品	
〃	38. 分銅形土製品・玉類・玉砾石	
〃	39. 中世土器・埴輪・一石五輪塔・人形型石 製品	
〃	40. 木製品	

## 第1章 布勢遺跡の概要と調査経過

### 第1節 布勢遺跡の位置と環境

布勢遺跡は、鳥取市布勢の布勢総合運動公園内にあり、国鉄鳥取駅より西方へ約4km程行った所で、湖山池の南東に位置する。湖山池は、中国山地に源を発する千代川によって膨大な量の土砂が日本海に運ばれて形成された潟湖である。この潟湖は、千代川右岸でも形成されている。

鳥取平野周辺部の縄文時代の遺跡は、潟湖によって形成された低湿地と砂丘地に位置する。千代川右岸においては、砂丘内遺跡を中心として直浪遺跡、追後遺跡等がみられる。千代川左岸では、湖山池周辺の低湿地遺跡を中心として青島遺跡、桂見遺跡等の遺跡群がみられ、それぞれを一定の単位地域として把えることができる。

縄文時代前期に比定される遺跡は、栗谷遺跡が認められる。桂見遺跡でも前期最終末の大歳山式に並行する土器が出土しているが量的には極めて乏しい。

中期では、千代川右岸が中心となっており中期前半から後半にわたった遺物を検出している栗谷遺跡、直浪遺跡、船元式の土器を出土した追後遺跡、船元～里木II式に並行する朽木山遺跡も中期に属する。この地域における中期の特徴は、直浪遺跡などの砂丘地内の遺跡が中心となることである。

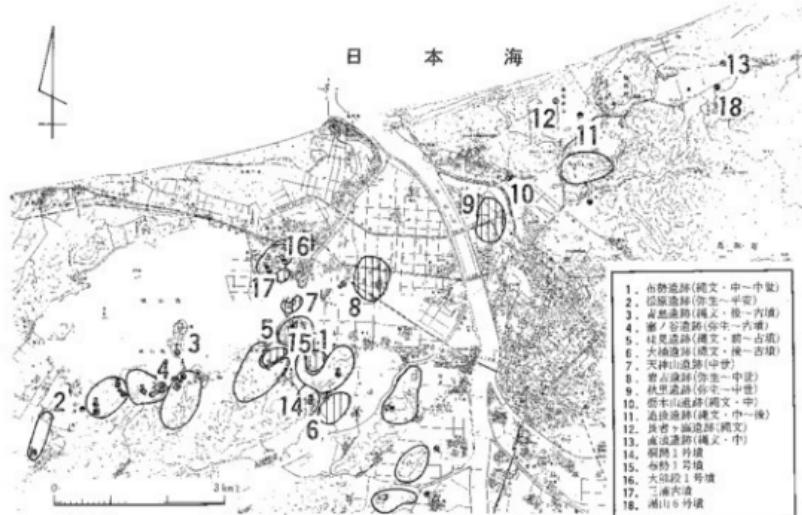
縄文時代後期になると、中期より継続する栗谷、直浪遺跡等が認められるが、この時期では千代川左岸の湖山池周辺の遺跡群が出現していく。布勢遺跡をはじめ青島・桂見・大桶等の低湿地遺跡がそれである。これらの遺跡は、いずれも湖山池の南東岸の後背湿地に立地しているのが特徴である。また、これらの遺跡は冬期において北西風を防ぐため低丘陵の東麓に立地し、布勢遺跡をはじめ桂見・大桶遺跡等では、南から北にのびる低丘陵先端付近の東麓に所在する。桂見遺跡は後期前半に比定され、布勢、青島遺跡が後期中葉に比定される。このように主体となる時期にいくらかの差異がみられ、時期によって集団移動の結果が遺跡の分布に表われていると考えられる。

弥生時代以降になると鳥取平野の遺跡数は密になり、生活空間の増加が推察できるが、遺物の出土状況等が不明確で遺跡の性格が判然としないものが多い。分布状況をみると、平野南部の空山、八坂山山麓、北東部の砂丘地帯、中央部の千代川左岸の微高地上、そして湖山池周辺にその分布がみられる。このうちでも千代川左岸の微高地上では、岩吉遺跡があり弥生時代前・中期を主体とし、秋里遺跡は後期後半から古墳時代にかけての祭祀的要素をもった遺跡である。また、湖山池周辺では、主体となる時期が中期以降の青島、布勢、松原、谷田遺跡等がみられる。他にも流氷水銅鐸を出土した高住遺跡がみられる。

古墳時代に至ると、この地域は千代川によって肥沃な沖積平野が形成され、農業生産力を背景として一大勢力分野を展開する。大熊段古墳(46.5m)、三浦1号墳(36m)、布勢

古墳（59m）、桶間1号墳（92m）をはじめとして13基の大型前方後円墳が築かれている。古墳以外でも、松原・谷田遺跡、木製品を出土した塞ノ谷遺跡、青島遺跡、布勢遺跡、大桶遺跡、岩吉遺跡、秋里遺跡等の集落跡、祭祀跡といった遺跡が分布している。

奈良時代以降、この地域は東大寺高庭庄に組み込まれ当時の名残りと思われる坪名も残っており、地域開発が進められたことが推察される。また中世に至っては、湖山池東岸の布勢天神山を中心に桂見、布勢等周辺の部落も含んで城下町を形成し、東部の政治、経済文化の一大中心地域として発展していたようである。（中野）



插図1 布勢遺跡周辺地図



插図2 鳥取平野周辺の縄文時代遺跡分布図

## 第2節 調査経過

〔遺跡の発見〕鳥取市は「布勢総合運動公園」建設工事を、鳥取市布勢の地に1962年に計画し、翌年より実施した。まず、野球場が水田を埋めたてて建設された。それに付随して谷間より流れ出る水の排水を目的とする側溝が丘陵沿いに掘削された。その際、この地を踏査した若林久雄氏（鳥取市立川在住）は、この側溝より福田KⅡ式、津雲A式に該当する後期縄文土器・石斧・石鏃などの石製品および耳栓を発見、これらを採集した。また同氏は、陸上競技場建設および周囲丘陵部の土砂採取の際にも、弥生土器をはじめ上師器・須恵器・石鐵等を発見し採集した。同時に削り取られた丘陵部断面に古墳が確認された。

通報を受けた鳥取市教育委員会および鳥取県教育委員会は、これ以上の掘削を禁止するとともに遺物包含地として『鳥取県遺跡分布図』および『鳥取県史』に掲載した。

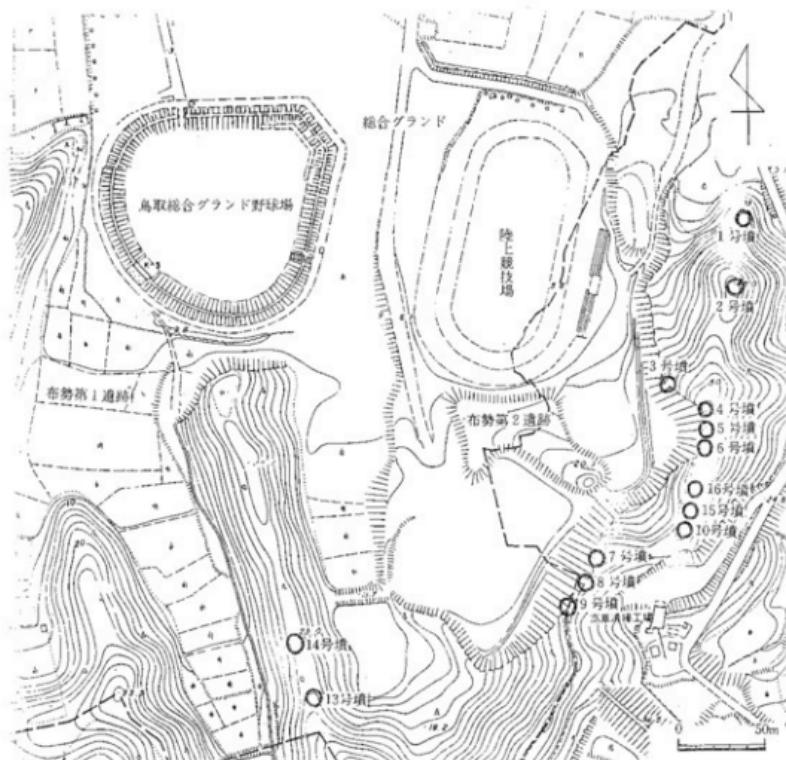
〔遺跡の調査〕「布勢総合運動公園建設事業」は鳥取市より県に移管され、新たな「布勢総合運動公園整備事業」が計画された。これに伴い、遺跡の分布調査が鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会および鳥取県教育文化財団によってなされ、新たに古墳が2基発見された。以前確認された野球場と陸上競技場の周辺および丘陵部の古墳を対象として、鳥取県教育文化財団が鳥取県都市計画課の委託を受け、東部埋蔵文化財発掘調査事務所を設立し、1980年7月1日から松保地区住民の協力を得てこれに着手した。

〔調査の方法〕縄文土器が出土する野球場周辺を布勢第1遺跡、弥生土器等の出土した陸上競技場南側の丘陵部を布勢第2遺跡、古墳の点在する丘陵部を布勢グランド古墳群と仮称した。調査区は工事用の基準杭を利用して、野球場の北西にある水田の中のNo.1の杭を基準に、東西南北をそれぞれ20m×20mの大グリッドに区分けし、南方面に1、2、3…、東方向にA、B、C…、西方向にA'、B'、C'…と番号を付し、それを「5A」「2A」と呼称し、布勢遺跡内を網羅した。それに加えて、大グリッドを10m×10mの中グリッド4つに分け北西をNW、北東NE、南西SW、南東SEとし、「1ANE」「1ANW」と呼称した。さらに第1遺跡では、中グリッドを5m×5mの小グリッド4つに区分けし、北西、南北、北東、北西の順にI～IVの番号を付し、「1ANEⅢグリッド」と呼称した。第2遺跡は中グリッドの東西を5つに区切り10m×2mのトレンチとし、「15NNEVトレンチ」と呼称した。

〔計画の変更〕当初1980年7月25日までに第1遺跡を、同年10月31日までに第2遺跡、1981年3月25日までに古墳群の調査を完了する予定であったが、8月中旬～9月下旬が地元果樹出荷作業の時期にあたり作業員の出稼が不安定であるうえ、例年にみられない冷夏および長雨等の気候的要因、第1遺跡が地表下3mという低湿地にあるため、湧水、崩壊という悪条件下で調査は遅々として進まず、第2遺跡においても、調査区が拡大し、調査期間の変更および調査の方法の変更をせざるを得なかった。変更には、都市計画課、上木出張所、県教委、調査団等関係各所間で協議がなされ、丘陵部の古墳については、調査

方針の変更、第2遺跡は重機を導入して、1m以上もの二次堆積土を除去し、55年度内に調査が完了するように努力が重ねられた。その結果、3月25日をもって現地調査を終了した。なお4月11日に地元を対象とする現地説明会をもち約150名の参加を得た。

〔整理作業〕55年度内は、現地作業に手を奪われ、整理作業はほとんど手がつけられていなかった。そこで、現地作業終了と同時に1981年5月末までの2ヶ月間で整理作業を行うこととなった。遺物は縄文土器がパンコンテナで25箱、弥生土器10箱、土師器10箱、須恵器16箱、石製品150点、木製品が300点あった。そのうち、遺構に関係あるものを中心に、とりあえず、報告書に掲載するものを整理することとなり、他は後日の作業とし、報告書の作成を行ない、5月30日をもって終了した。(中村)



挿図3 布勢遺跡配置図

## 第2章 布勢第1遺跡

### 第1節 概 要

ラグビー場観覧席建設予定地を中心として旧野球場周辺に $5\text{m} \times 5\text{m}$ グリッドを12ヶ所、 $10\text{m} \times 5\text{m}$ グリッド2ヶ所の計14グリッド、400 m<sup>2</sup>の調査を行った。遺跡は丘陵部東側の低湿地にあり、絶え間ない湧水に悩まされながら、9ASEⅢグリッドの地表下約5mをはじめ全ての調査グリッドにおいて地表下3m内外の掘り下げが必要であった。全ての調査区において、耕作土層に約1.5~2mの厚みで植物が堆積しており、植物層が粘土に移行する海拔1mあたりから後期縄文土器が出土する。そのうち、12CNWⅢグリッドにおいては、杭と板による木組み造構、漆器、櫛、鉢、ひしゃくなどの木製品と編み物が出土。9ANWⅠでは溝状造構、3ASEⅢでは炉跡とピットが検出された。また5ASEⅠでは、極大な量の土器片、石器類、土製品が出土した。他の調査グリッドは、少量の土器片を出土したのみで、遺構と思われるものは検出されなかった。(中村)



図4 布勢第1遺跡調査グリッド配置図

## 第2節 調査区内容

### (1) 17 A

第1遺跡の最も南に位置し、北東一南西方向に10×5mのグリッドを設定し、2.6m程握り下げた時点で東壁が崩れ、危険なため調査を打ちきった。遺物はなかった。(坂本)

### (2) 15 B

布勢遺跡中央の南から北へのびる丘陵の西麓に位置する。腐植土層および粘土層において、遺物、遺構等は検出されなかった。(長岡)

### (3) 13 B' NE III

腐植土中より縄文上器片が6点出土。遺構は検出されなかった。(中村)

### (4) 13 ANE IV

谷間のほぼ中央に位置する。腐植土の下がすぐ砂層となり、粘土層はみられなかった。他の調査区の砂層が無造物層であるのに対し、このグリッドにおいては、縄文土器の小片が71点と多く出土し、植物遺体および流木も含むため、この砂層は他の調査区の粘質土と同時期と思われる。(中村)

### (5) 13 B NE IV

山のふもとに位置する13BNEIVは、他のグリッドに比べ、腐植土層の堆積が浅く、深いところで約1m、深いところで約2mと斜面にそって腐植上の堆積が認められた。

第2層の黒色粘土層より陶磁器、第9層と第10層の中間もしくは10層の砂層中より縄文土器が数点、石錘が4点出土した。遺構は、多量の流、湧水のため確認できなかった。(津川)

### (6) 11 B' NE III

丘陵の東裾に位置する。第1層より光沢をもつ淡緑色の磁器片が、第2層より管状土錘が3点出土した。腐植土上層より台付無頸壺、下層より縄文土器の小片が3点出土したが、遺構は検出されなかった。(中村)

### (7) 9 ASE III

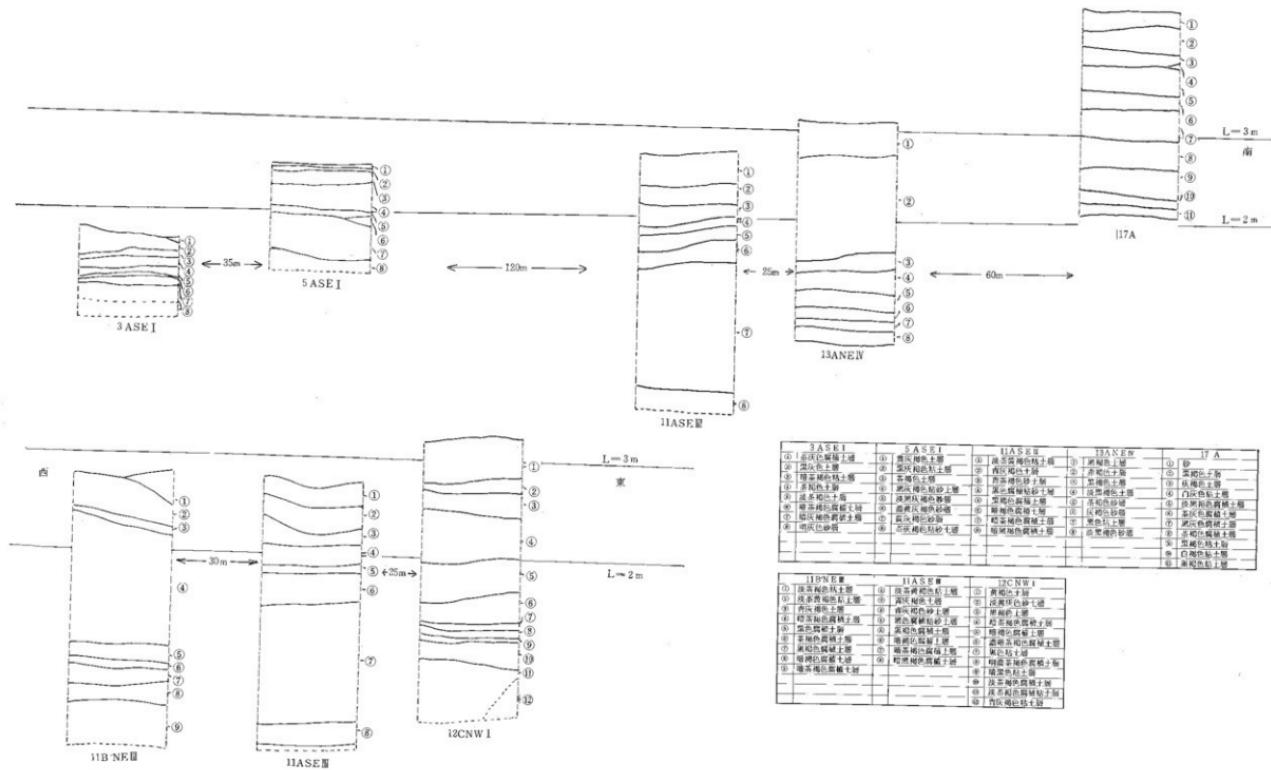
地表下約5m辺りで腐植土が終り、粘土層となっている。腐植土層と粘土層より縄文土器が3点出土している。遺構等は検出されなかった。(長岡)

### (8) 11 ASE III

表土下70cm位の第4層(小粒の砂と少し植物を含む黒色粘土層中)より陶器、須恵器、すりばち、土錘等が出土。縄文土器が数点下層の腐植土より出土している。遺構は、多量の湧水と泥水のため確認できなかった。(長岀)

### (9) 8 A' NE I

山の東麓に位置し、以前は水田として利用されていた。腐植土の下層から砂層にかけて縁帯文系土器が出土している。遺構は検出されなかった。(中村)



挿図5 布勢第1遺跡土層図

#### (10) 5 ASE I

旧野球場のライトスタンド下で、丘陵の東麓に位置する。丘陵の東斜面にそって土の堆積がみられるが、野球場建設時に土の入れ替えがおこなわれている。第4層の黒色腐植粘質砂質土中より、数点の青白磁とともにトロ箱に20箱の縄文土器片が出土した。その他、石斧10点、石鎌1点、石錘21点、耳栓1点、垂飾1点、用途不明品1点が出土したが、遺構は検出されなかった。（中村）

#### (11) 3 ASE III

野球場西側の山際に位置する3 ASE IIIは、今回の調査区域の最北端にある。この地域は、野球場等を造る際かなりの山土が入っており現地表下1.5mもの客土があった。腐植上層は客土の下で、約1m程の堆積が山の傾斜にそって見られた。遺物として、縄文土器、木の実等が腐植土層と砂層の接点あるいは、砂層中より沢山検出された。遺構については、炉跡らしきものを検出しているが、多量の流、湧水のためおし流されて原形をとどめていない。

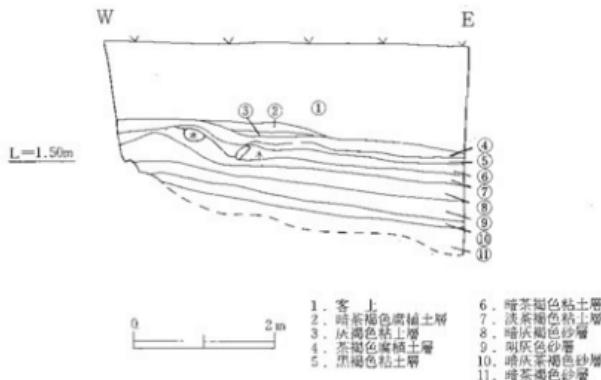
##### (炉 跡)

地表下約3m、腐植土層の間にはさまれた厚さ50cmぐらいの砂層(明灰色)の上面に砂が焼けた跡(明茶灰色)があり、炭化した木片が点在して残っていた。焼け跡は長径1.5m、短径0.6mぐらいの長円形で焼砂の厚さは約3cmを測る。焼砂の中心は3ヶ所見られ、長・短径約20cmの円形をなす。縄文時代の炉跡としては、(A類)焼土の上面を焼けた粘土塊が覆って炉床を形成するもの、(B類)粘土塊や小砂利は認められず焼土のみのものでいわゆる地床炉と呼ばれるもの、の二つのタイプが京都府桑飼下遺跡で報告されている。布勢のものは焼砂のみで粘土塊や小砂利は認められず、炉跡とするならば(B類)タイプと考えられる。(津川)

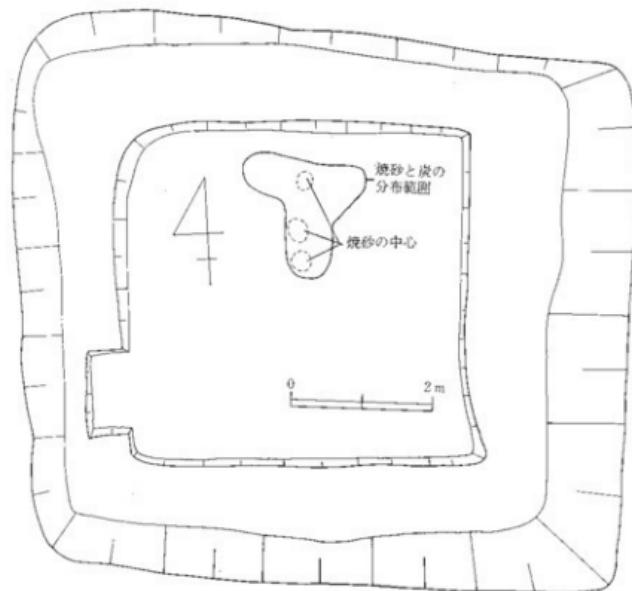
#### (12) 9 A' NW I

野球場の西側を南北にのびる丘陵の東山裾にあり、8 A' NE Iの南15mに位置する。約10年前まで水田であった為、表土は粘質土である。地表下2~2.5mで砂層に達する(海拔0.5~0.9m)。砂層の上は腐植土が形成されており、海拔1~1.3m付近に厚さ約8cmの乳白色粘質土が形成されており、腐植土の成長が停止している。これより上層は、海拔2m付近まで腐植土が堆積しており、長期にわたって湖沼化していたことが考えられる。

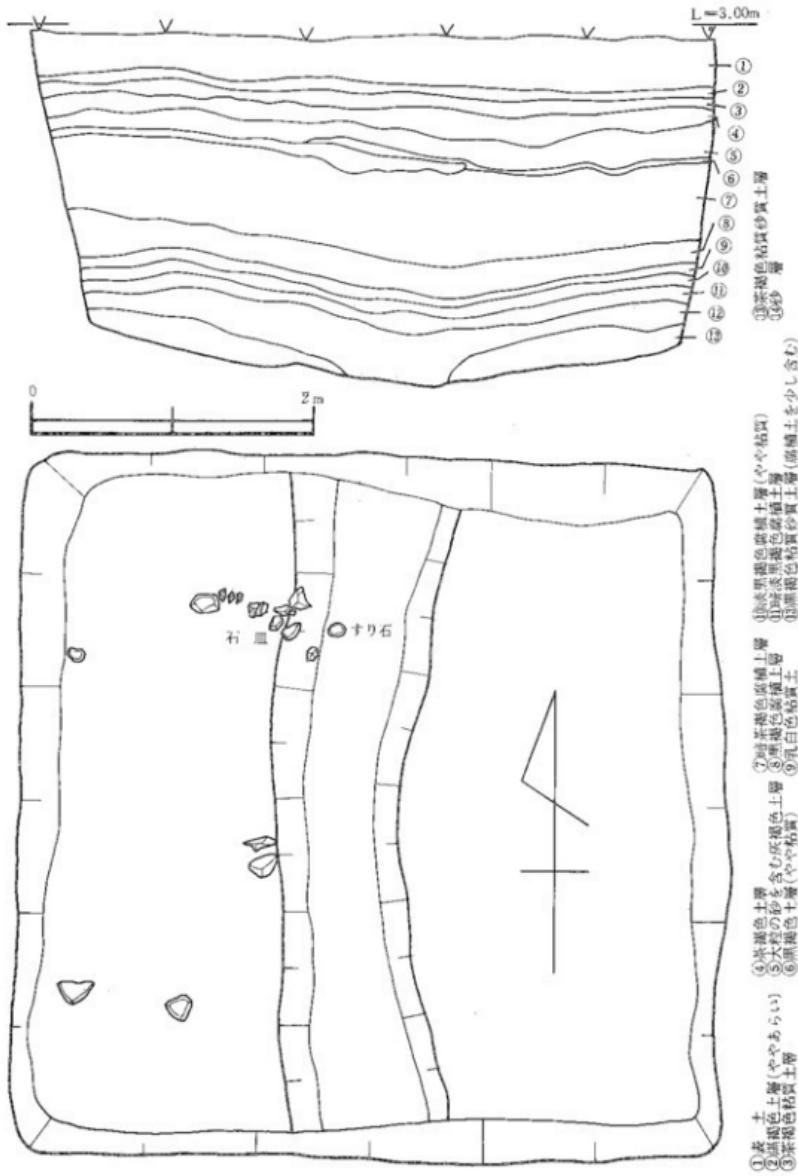
当グリッドでは、砂層上に溝状遺構が検出された。グリッド中央部をほぼ南北に走っており、幅0.85~1.10m、深さ10~15cmを測る。溝の北側の西肩部において、石皿、すり石に混じって縄文土器底部が出土している。また、グリッド南西隅の砂層上では上げ底ぎみの縄文土器底部、口縁部の外に粘土紐を貼りつけ、そこに刺突文を施したもののが出土している。これらは、中期の標式的形式としての「船元式」土器群の特徴をもつ。この他には、腐植土を少し含む黒褐色粘質砂質土層において、網代圧痕をもつ底部と撚糸文が施された小型の深鉢形土器が検出された。(中野)



插図 6 3ASE III南断面図



插図 7 3ASE III遺構図



挿図 8 9 A'NW I 遺構・断面図

### ⑩(3) 12 CNW I・III

野球場の南側に南北にのびる20mの低丘陵があり、その先端付近の西麓に所在する。11 ASE IIIの東20m、13 BNEJVの北15mに位置する。野球場建設以前は水田化されており、その後に真砂土の客土（厚さ約80cm）がみられる。旧耕作土は粘質で黒褐色を呈し、下半は中世遺物の包含層である。この旧耕作土の下層は、海拔0M付近（地表面より約3.4m以下）まで腐植土の堆積がみられる。腐植土は、旧地形が北西に向って低くなっている、その斜面に沿ってほぼ平行に堆積している。海拔0.8m～1.5mにかけて濃暗茶褐色腐植土（挿図9・8層）の堆積しており、この上面に薄い白砂層（挿図9・7層）が認められ、この時点では腐植土の成長が一時停止したことが考えられる。この白砂層より上層では、全く遺物を包含しない腐植土が旧耕作土を形成するまで成長を続いている。これに対し、白砂より下層においては、福田K IIに併行する完形の変形土器をはじめ多くの縄文土器、石製品、木製品、種子等を包含している。

当グリッドでは、福田K II式土器とほぼ同一レベルで遺物が検出された。石製品では磨製石斧1点、石皿2点、すり石1点等がみられた。木製品では、漆塗木器2点（鉢・腕輪）杓子1点、木鉢3点、櫛8点、杭4点、石斧柄2点、不明木製品多数等がみられる。出土した櫛の内2点はほぼ完形であるが、本来の使用目的を失って杭に転用されていた。この杭（櫛）と上掲の杭は砂層に突き刺さっており、杭の役目を果している。また、グリッド中央部の杭は板と絡み合っており、他の杭との位置を考えると水路跡であった可能性が強い。当グリッドで出土した木、木製品等のほとんどは、この水路に平行して確認された。この他に、ヒノキの繊維で編まれたカゴ4点の出土が確認されている。（中野）

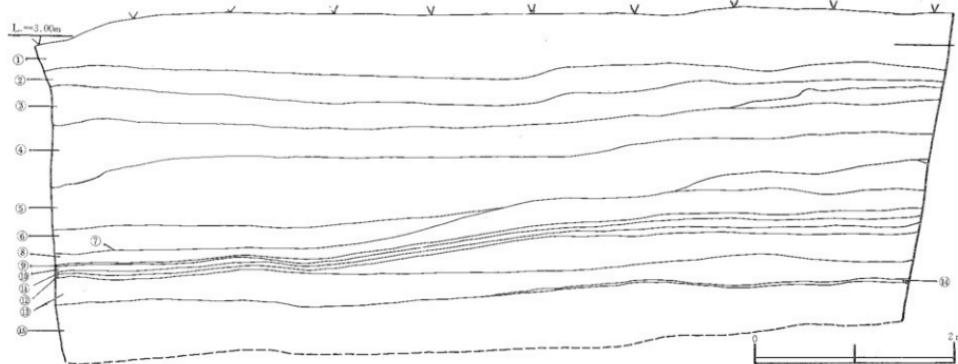


図9 12CNW I・Ⅲ北壁断面図



図10 12CNW I・Ⅲ平面図

### 第3節 出土遺物

#### 1 繩文土器

厖大な量の土器が出土した5ASEIをのぞけば、他の調査グリッドにおいては、土器細片が少量しか出土しなかった。5ASEIは、以前、若林久雄氏が多量の土器を採集された場所に近く、このあたりには、まだ多くの土器が埋っているものと思われる。

ここで土器の分類は、5ASEI出土の土器を中心として、若干の土器を抽出、分類したものである。そのため、ここで土器の分類は一応、器形・施文方法・文様などの特徴を取り上げて分類したにすぎず、そのままでは型式を意味していない。

布勢出土の土器は、中期・後期初頭・後期中葉に大別できる。

##### (1) 中期前半（挿図11、図版6）

9A'NW Iのみで出土している。口縁上端に粘土を貼りつけ肥厚させ、その下に繩文を施すことを特色としている。船元式土器と思われる。②・③は、口唇部に刻突文がなされている。①明黄褐色、②暗茶褐色、③茶褐色。



挿図11 中期前半土器実測図

##### (2) 後期初頭の土器（挿図12、図版6）

肉厚の口唇部が特色で波状となる。外面の磨消繩文が曲線的であり、中津式に併行すると思われる。



挿図12 後期初頭土器実測図

##### (3) 後期中葉の土器（挿図13、図版6）

出土量から判断して、布勢第1遺跡の主体をなす土器と思われる。型式的には平城式、津雲A式、彦崎K1式等の土器に併行するものと考えられる。器形、施文方法、文様等から6類に分類できる。

###### a. 第1類上器（挿図13、図版7）

整形・鉢形土器である。縁帶文系土器で、内外を肥厚させている。口頸部にアーチ状の把手をもつものが多い。文様は磨消し、沈線で構成されており、少ないが列点文をもつものもみられる（①・④）。隆帶状手法による文様（⑦・⑩）もこの部類に属

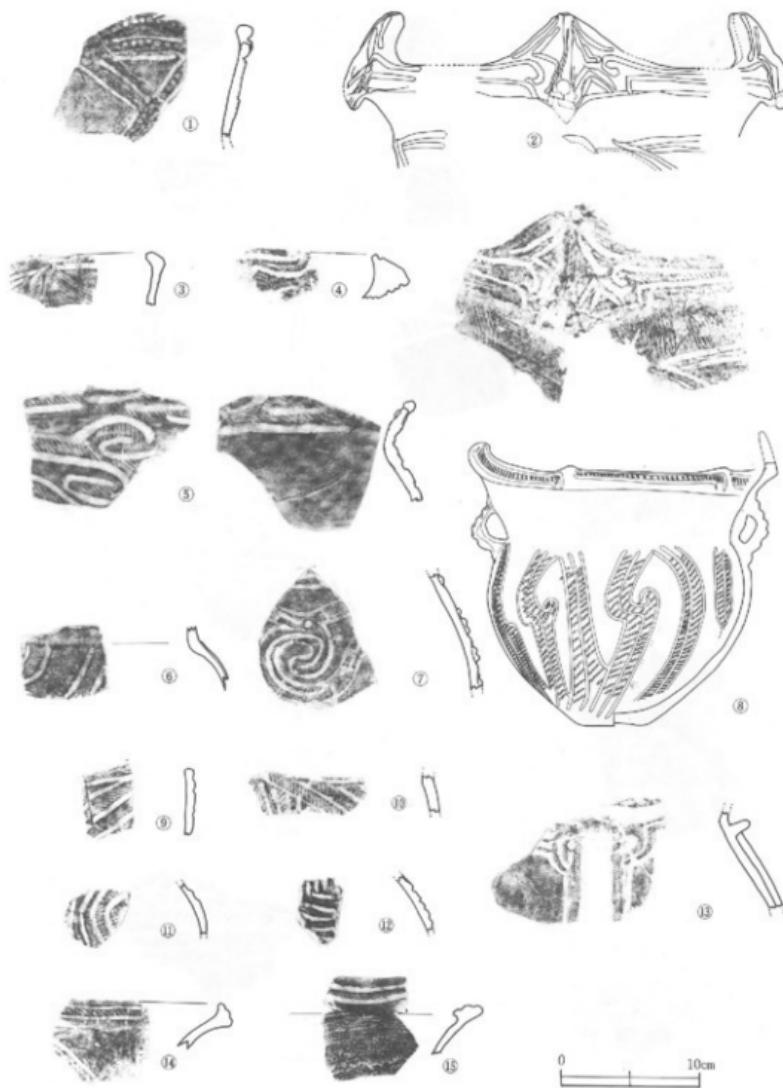
すると思われるし、文様の先端がワラビ状になり、2本がらみとなるのが特色である。①は、やや斜めに立ち上がる波状口縁をなし、幾何学的文様の凸帯文をもつ。凸帯の両側に沈線があり、凸帯部には竹管文が施されている。⑥は、「く」字状の波状口頸部で、口縁をやや肥厚させ、内外面を沈線と繩文で飾る。沈線は、繩文地にほどこされており、太い「U」字溝で、横方向を主体として、直線と曲線でもって構成されており、2本の沈線が、両端でからみ合うようになっている。沈線間は、繩文ときれいに磨り消された面が交互にくる。⑦は、曲線を主体とする沈線で飾られた深鉢の肩部である。粘土紐でもって曲線凸帯をつくり、2本の凸帯が両端でからみ合っている。凸帯には、曲線にあわせて繩文がなされている。凸帯の両脇には、ヘラにより浅い「U」字形の沈線がほどこされており、他の部分は、きれいに磨かれている。⑧は、やや外反する頸部上端に粘土をつきだして、やや肥厚した口縁部をつくる。その口縁部外面に2本の太い沈線を描き、繩文を施している。頸部は無文で、磨いている。胴部は丸くふくらみ、太い3本の沈線で繩文帯を区画し、肩部より底部付近まで垂下している。沈線は連続するものと途中でからむるものとがあり、暗褐色を呈す。

b 第2類土器（挿図14、図版7）

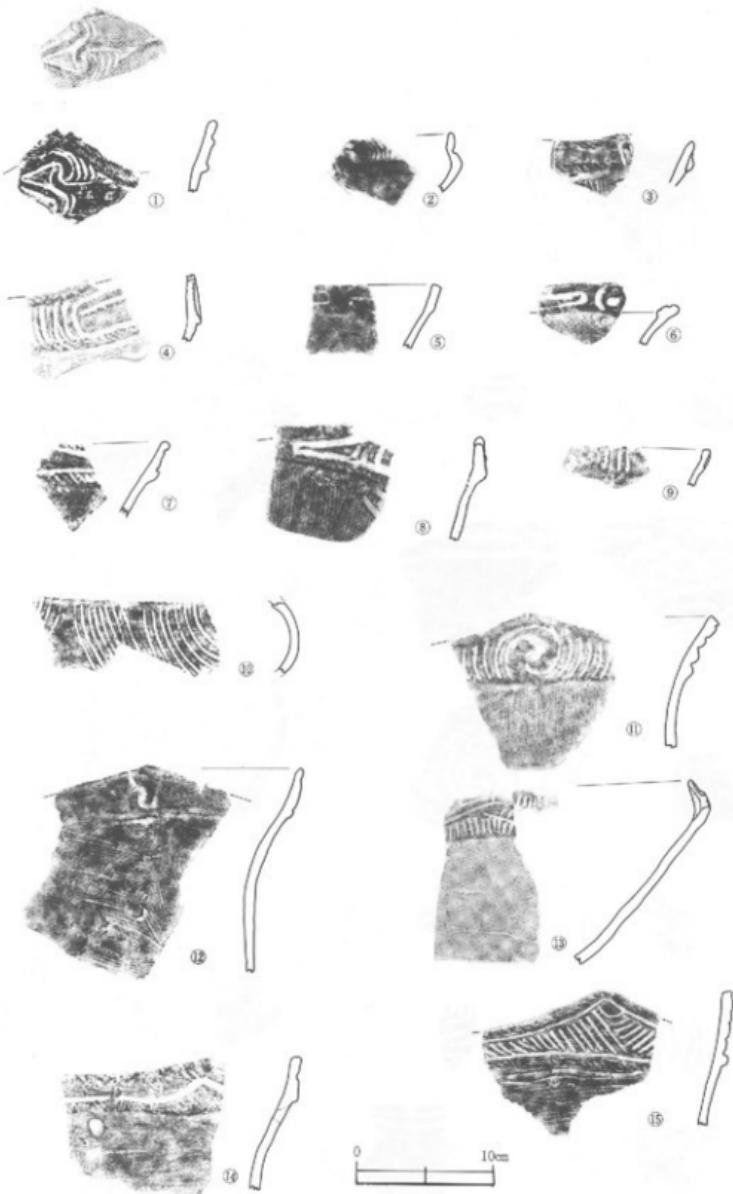
縁帶文系土器で、深鉢形土器が大部分であるが浅鉢形土器もある。繩文地・条痕地に沈線をいくつかの単位で施し、そのまわりで波状口縁をなす。頸部を無文（ハケ目）にし、胴部は繩文地に沈線文等を施す。①波状口縁をもつ深鉢形土器である。からみ合う2本の凸帯文のまわりに弧状の沈線をもつ。褐色。②「く」の字状の口頸部の浅鉢型土器で、直線と弧状の沈線文をもつ。他は内外面とも研磨されている。黒褐色。⑥ななめに広く深鉢の口縁部である。口縁の内側を肥厚させ、直線と曲線で構成された沈線を施している。⑧波状口縁をもつ深鉢型土器である。頸部まで斜めに立ち上がり、口唇部は直垂に立ち上がる。口唇部に繩文をもち、沈線文で分けている。沈線は浅い「U」字状をなす。頸部下は縦方向のハケ目調整が施されており、そこにも沈線がみられる。褐色。⑩は頸部がやや外反する深鉢である。口縁端部がわずかに凹状な平坦をなしそこに繩文をもつ。口唇部外側は弧状の沈線によって区画されている。繩文が円周にそって施されており頸部以下を縦方向のハケ目で調整している。褐色を呈す。⑮は波状口縁をもつ深鉢形土器で、口縁にそった沈線と頸部の沈線間にはさまれた部分に短い斜めの沈線が幾条にも入る。沈線の外側には繩文が施され、頸部下は、ヘラによる横方向の調整が施される。

c 第3類土器（挿図15、図版8）

縁帶文系上器で、口唇部を繩文地にし、1～2本の沈線が平行に走るのが特徴である。

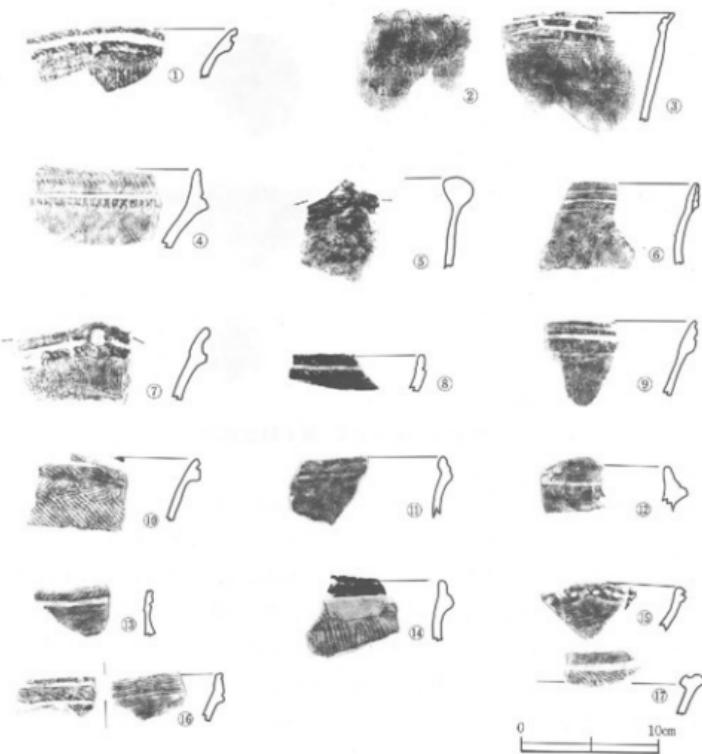


插図13 後期中葉 第1類土器図



插図14 後期中葉第2類土器図

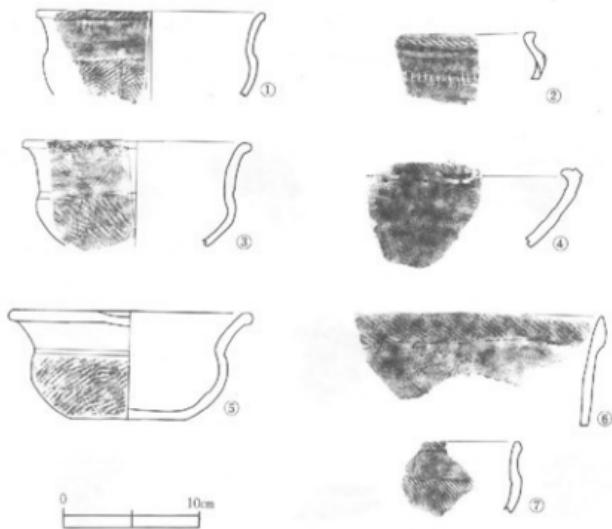
中には刻み目を施すものもある④。第2類と同様に、頸部を無文とする。⑨は、斜めに立ち上がる口縁部で、撚り糸文を施した口縁部に2本の沈線が平行にめぐる。頸部以下にも繩文がみられるが、頸部は磨り消されている。



挿図15 後期中葉 第3類土器図

d. 第4類土器（挿図16、図版8）

繩文のみによって施文の効果をあげている土器で、頸部を除いて、口唇部、胴部に左上から右下に向って斜行繩文がみられ、口唇部裏面にも同じ性質の文様帯をもつものの④、と刻み目を肩部に付すもの②がある。繩文の施文のしかたに規則的なもの③と不規則なもの①とがある。⑤は、注口をもつ浅鉢型土器で、胴部以下に繩文が施されている。頸部はきれいに磨かれており、繩文帯との境に浅い沈線をもつ。淡褐色を呈す。



挿図16 後期中葉 第4類土器図

e. 第5類土器（挿図17、図版9）

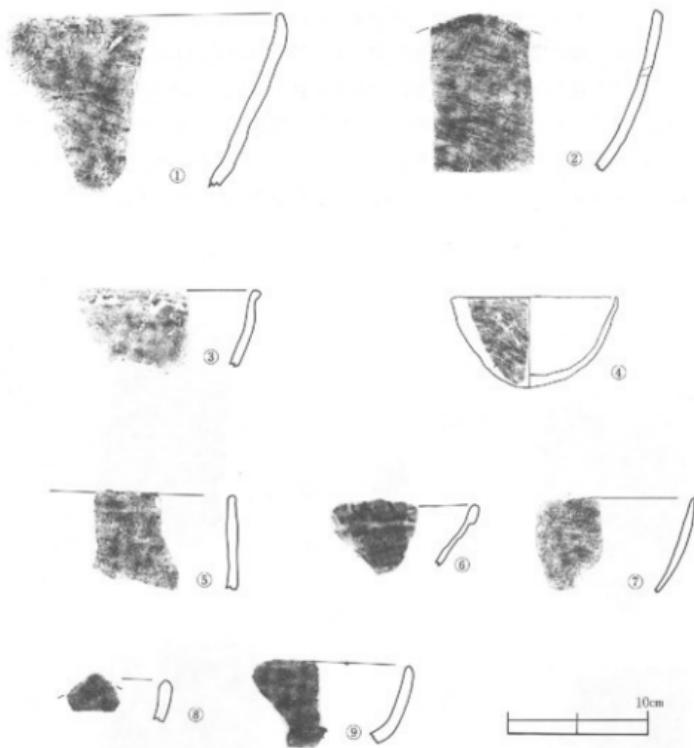
無文の小型丸底浅鉢の一群で、器面がよくみがかれているものとそうでないものとがある。口縁は平縁と波状口縁の二種類がみられる。②は波状口縁で、内外面ともきれいにみがかれている。補修孔をもつ。黒色。④は、椀状の鉢で、やや内湾気味に斜めに立ち上がり、口縁端部はつまみ上げられている。外部は粘土紐の接合跡を消すためにヘラ状のもので横方向を主体に粗雑にみがいた後、ハケ状のものを使用している。内面は、ヘラで反時計回りで、不規則にけずっている。暗褐色。⑥は、内薄で、口縁部を肥厚させ、口唇部を、指でつまんで刻みのようにしている。黒褐色。

f. 第6類土器（挿図18、図版8）

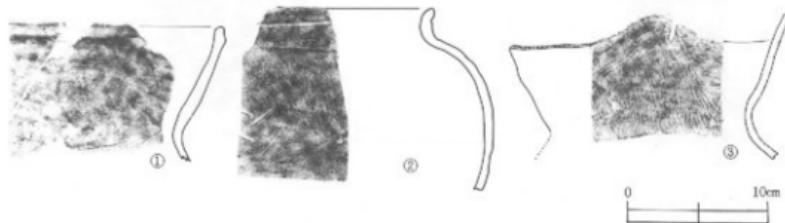
壺型上器で、無文のものと縄文地の両者がある。①は、無文で口縁部にわずかな凸帯がめぐる。淡茶褐色を呈す。③は、波状口縁で、口縁部に縄文を付し、他は縦方向の条痕がみられる。

g. 粗成土器（挿図19、20、図版9、10）

口縁には外反、直口、内湾の3者がみられる。口唇部は細く尖った形態が普通で、丸味を持ったものは、一時期下るかもしれない。口縁部では縦方向に条痕やハケ日を残し、胴部は横方向に走るものと、ナデ整形のものとがあり、その境目に沈線を施すことがある。又、胴部を縄文地でうめるものもある。③やや開く口縁部の外面上部を

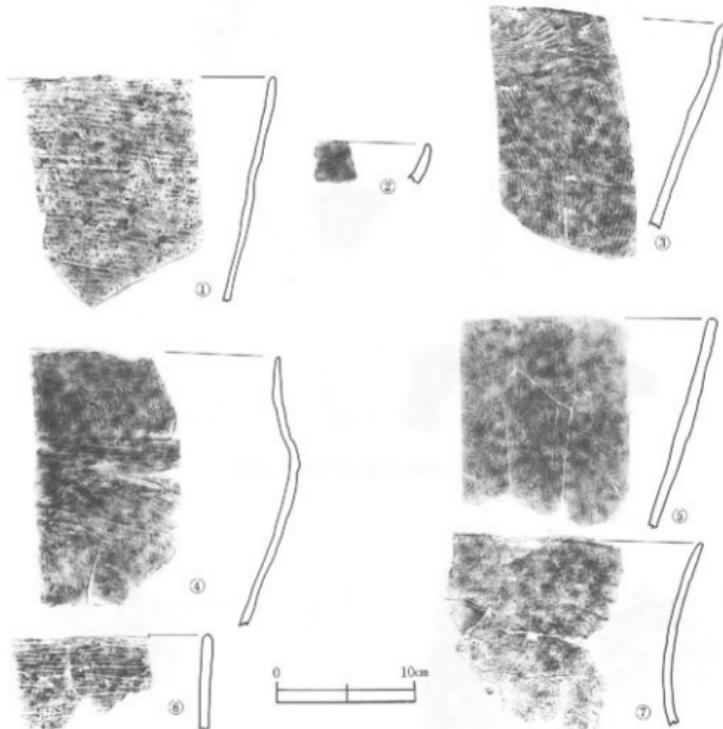


挿図17 後期中葉 第5類土器図

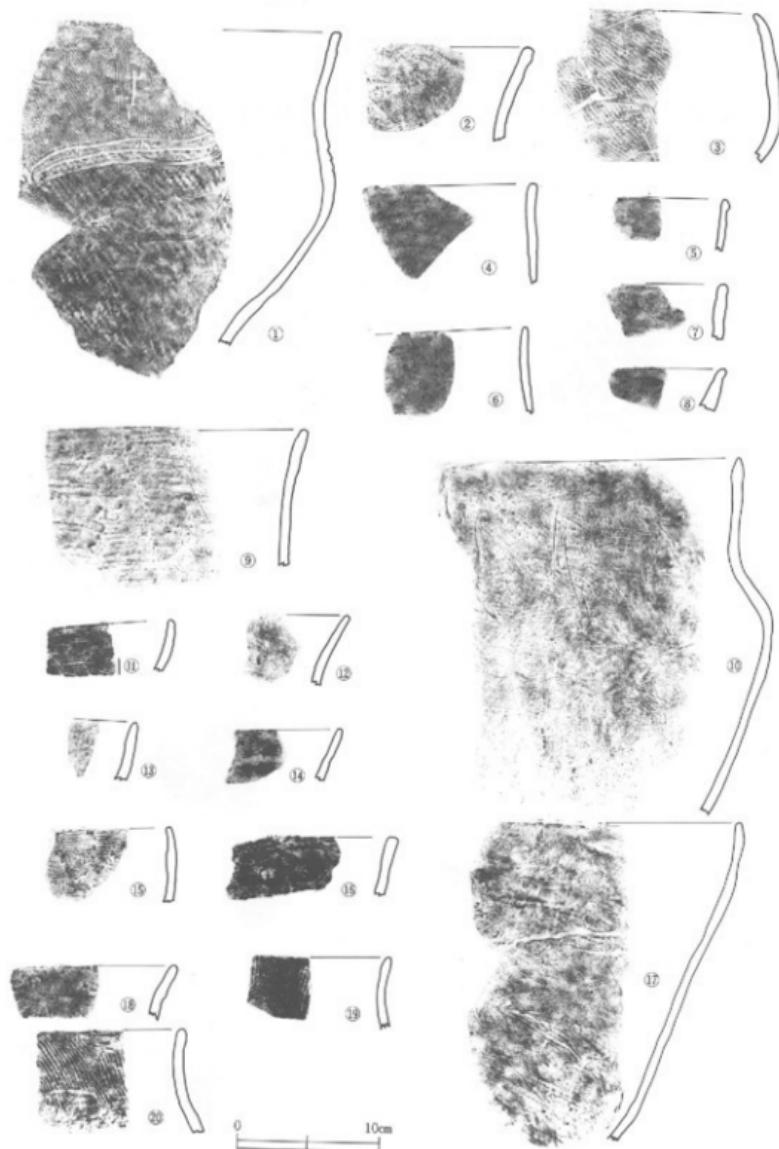


挿図18 後期中葉第6類土器図

横に胴部では縦方向のハケ目が施されている。又、内面には横方向のハケ目がみられる。黒褐色。④は、やや内傾する口頸部で、口頸部は横方向の条痕地で仕上げており、頸部と胴部と境に段をもつ。黒褐色を呈す。挿図20の①、口縁部はゆるい「く」の字をなす。口頸部を縦方向のハケ目、胴部に縦文を付するが、その痕は不鮮明である。頸部と胴部の境に「～」状線が3本施されている。淡茶褐色。⑦やや外反気味に開く口縁部で、内外面ともナデによる調整がなされている。暗褐色。⑩「く」の字状の口頸部。口縁端部の内外面に横方向の条痕がみられる。頸部外面を縦、胴部を横方向の条痕が走り黒褐色を呈す。



挿図19 後期中葉 粗成土器図1

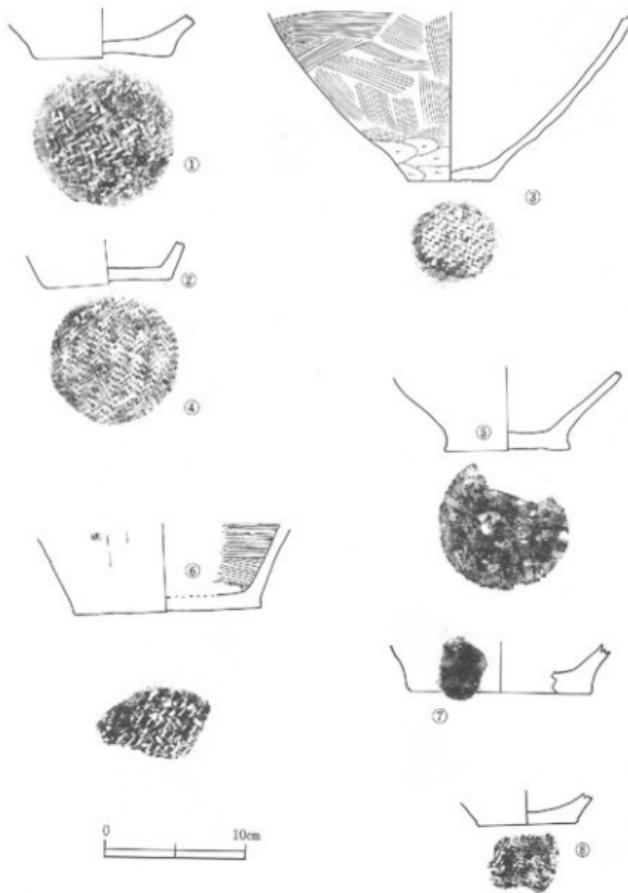


插図20 後期中葉 粗成土器図 2

(4) 土器底部 (挿図21～23、図版11、12)

完形が少ないので、底部の形体により2種類に分け、さらにそれを、底部圧痕をもつものともたないものに分類した。

a. (挿図21) 平底で、底部に圧痕をもつものである。胴部下半に縦方向の条痕をもつことを特色としている。底部圧痕は網代（アンペラ）編みで、その編み方には、①1本

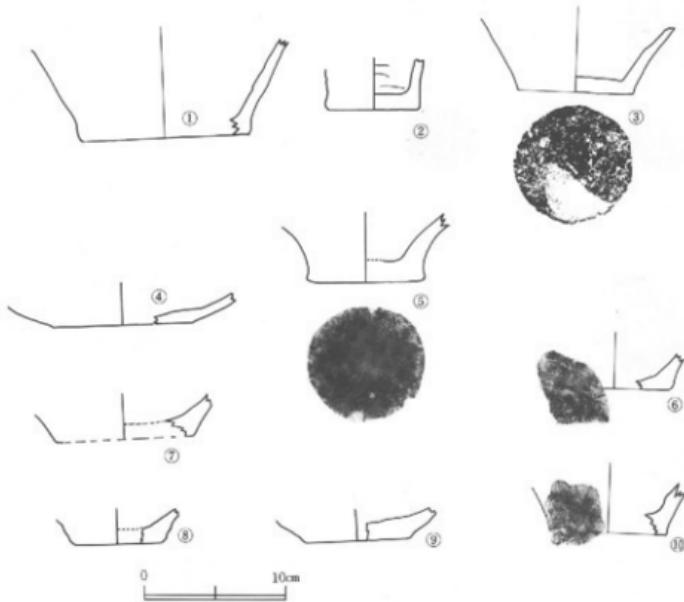


挿図21 土器底部図1

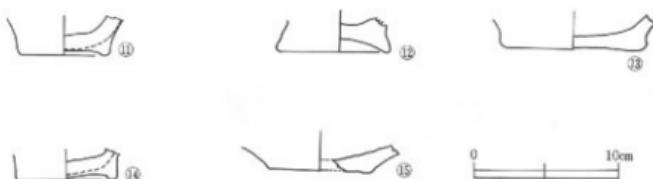
越え、1本潜り、1本送り、②2本越え、2本潜り、1本送り、③2本越え、3本潜り、1本送りの3種類がみられる。

b. (挿図22) 平底で、底部圧痕をもたないものである。

c. (挿図23) あげ底状の底部で、底部圧痕をもたないものである。



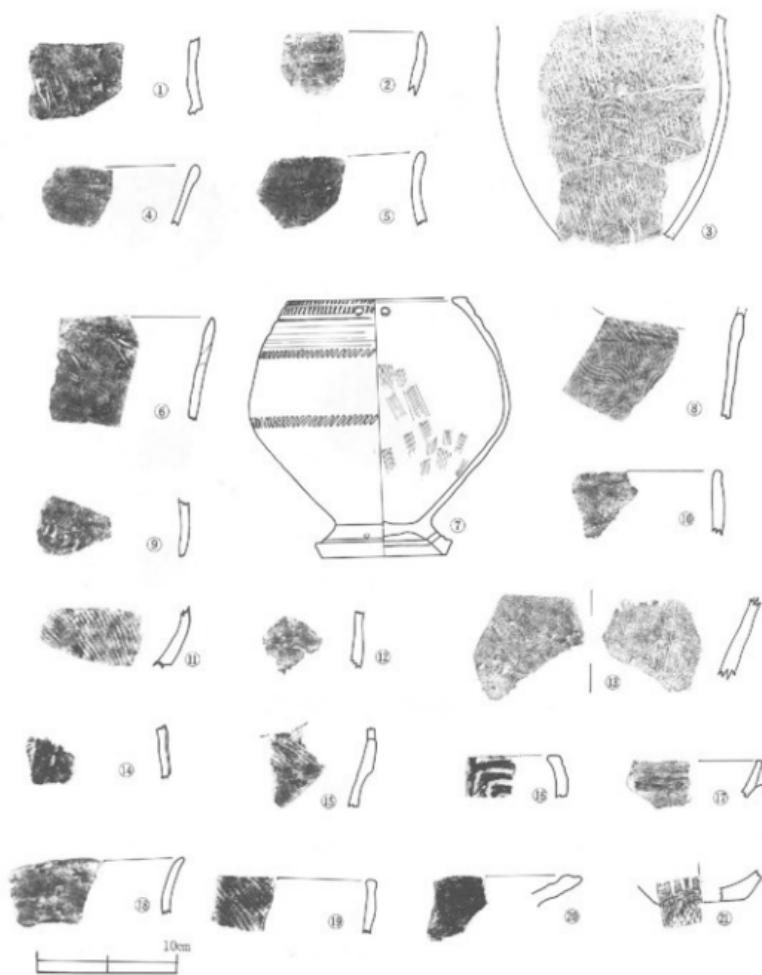
挿図22 土器底部図 2



挿図23 土器底部図 3

(5) その他の土器

⑦台付の無頸壺、口縁部と台部に紐をとおすと思われる孔を左右に1対づつ有し、凹線と擦り条文が交互にめぐっている。内面をハケ状工具で斜めに調整しており褐色を呈す。元住吉山Ⅱ式かと思われる。(中村)



挿図24 その他の土器図

## 2. 石器・石製品

### (1) はじめに

労働用具、生活用具として使われた石器、石製品が縄文土器に伴って8器種72点出土している。器種別の点数は以下の記述の中でふれるが、とりわけ石錘は他の石器に比べ40点と多量に出土している。石器の分類は、形態的な面から従来の分類にもとづいて行った。機能面からの追求は今後の課題であり、布勢第1遺跡から出土している木製品（椀・腕輪・漆器等）、草木のツル、茎等を材料にした籠の加工、製作技術を知る上でも石器の追求は重要となってくる。これらに用いられた石材は、鳥取大学教育学部地学教室教授赤木三郎氏、同講師岡田昭明氏に、石錘については、奈良大学助教授水野正好氏、山名敬氏（博物館学芸課長補佐）、中野知行氏に指導と御教示いただきました。銘記して、感謝します。

石材の種類をみると、石英安山岩、流紋質凝灰岩、角閃石安山岩、砂岩、はんれい岩、輝石安山岩、玄武岩等、多種の岩石がみられる。しかし、鋭い刃を必要とする石鎌には、無紋晶質安山岩、玄武岩が多用されるなど、その石のもつ物理性質が十分に生かされ、必要に応じた使い方がされている。

### (2) 敲き石（挿図27、図版13）

完形品のみ6点出土した。それらの最大径は、6～11cm、最小径4～8cm、厚さ4～7cm、重量50～200gと、手ごろなものばかりである。敲き石の中に入れたものでも、すり面を有するもの①もあり、敲いた面が顯著なものをこの分類の中に含めた。石材は輝石安山岩が用いられている。

### (3) すり石（挿図27、図版13）

完形品・破片を合わせて7点出土している。それらの最大径10～12cm、最小径8～11cm、厚さ5～6cm重さ90～300gと手ごろであり手に持ちやすいものである。すり面が顯著なものをすり石に入れた。⑤は、手に持ちやすいようにくびれが作ってある。すり面は以前もっと厚みがあったと思われるが、使用されたためすりへったものと思われる。きめのあらい石にもかかわらず、すり面はつるんとしている。すり面が焼けたように黒ずんでいるもの⑥がある。何かをすりつぶした際のアカがそのまま残ったものと思われる。石材は角閃石安山岩、石英安山岩が用いられている。

### (4) 石皿（挿図27、図版13）

破片のみで4点出土している。完形ならば大きいものは直径50cm前後、小さいもので直径30cm前後に達すると考えられる。辺縁部と皿状部分との差は深いもので4.5cm浅いもので1.0cmを測る。4点とも、すり面もさることながら側面の整形などもきちんと行われている。石皿として特記に値するものは、石皿凹部が黒ずみその周辺全体が焼けたようになっているもの⑦がある。恐らく木の実、それもアカの強いものをす

り石でつぶした際にそのアカが黒く残った痕跡と思われる。現に出土遺物として、アカの強い、トチの実やその殻、クルミが沢山出土している点から、トチやクルミをすりつぶした際に出たアカがそのまま石皿に残ったものと思われる。すり石と石皿が同時に出土していることから、両者がセットであることが実証された。石材は粗粒の斑晶をもつ安山岩が用いられている。

(5) 打製石斧(挿図28、図版13)

2点とも完形品で出土している。石材は玄武岩、安山岩が1点ずつみられる。これらの打製石斧は形態的に、短冊形をした細長く平たいもの①と、ずんぐりと断面がひし形になるもの②とに分類される。2点とも両面から加工しただけのものであるが、①に比べ②の方が刃部がするどく、刃部の巾が頭部の巾の約2.3倍ある。

(6) 磨製石斧(挿図28、図版13)

全部で11点出土している。完形品は11点のうち2点だけで、他は刃部脛部の破片である。刃の部分を見ると、全部といっていい位両面から磨き上げられており、両刃の石斧でふくらみを持つ蛤刃石斧のものである。刃縁は、③、④のように丸みをもって作られているもの⑤、⑥のように直線的に仕上げられているものがあり、わりとするどい刃がつけられている。破片ではあるが、一番小さい石斧の刃部⑦が出土している。刃が磨滅している点から実際に使用されたものと思われる。そこで、木器の細部加工に用いられたのではないかと想像するが、実際のところはわからない。他に乳棒状石斧⑧が1点のみ出土している。長い丸棒状で、刃はやや丸みを帯びている。これらの石材は板状安山岩、はんれい岩が用いられている。

(7) 石 鐵(挿図29-①、図版14)

排土中より1点のみ検出された。形態は、二等辺三角形の底の方に深いえぐりが入るもので、片側半分がかけている。長さ1.6cm、巾1.0cm、厚さ0.3cmを測る小型の石鐵である。石材は、無紋晶安山岩が使われている。

(8) 砧石状磨製石器(挿図29-②、図版14)

排土中より検出された。砧石にみられるような磨滅した面がみられたが、何に使用されたのかわからぬため砧石状磨製石器と名付けた。長軸2.0cm、短軸1.65cm、厚さ0.7cmを測る。石材は、流紋岩質凝灰岩である。

(9) 石 鍤(挿図30、図版14)

第1遺跡の石鍤は、完形品(35個)、破片(5個)を合わせて40個出土している。石材は安山岩が主流を占め細粒砂岩、黒色千枚岩、閃緑岩、花崗岩も混じっており多種の石が利用されている。出土した石鍤の内32個は、楕円形の長軸の両端に両面から打撃を加え打ち欠きによる糸かけを作り出したものがある(①~⑥)。40個のうち5個は、渡辺誠氏によれば切目石鍤A種(挿図26)に分類される長軸の両端に切り込

みを入れた切目石錘である(⑥～⑧)。卵形をしたまるい石に長・短軸それぞれに溝を施し糸かけをつくり、十文字に結んで使用したと思われる有溝石錘⑨また溝が長軸をほぼ一周する有溝石錘⑩もある。各1点ずつ出土。

特異なものでは、1点のみ非常に小さく(縦2.5cm、横1.6cm、重さ3.0g)全体を加工し、打ち欠きによる糸かけを作り出したもの⑪が出土している。

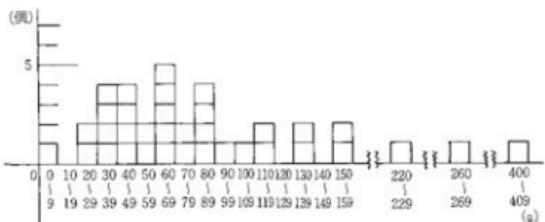
これらの石錘の重量を完形品についてみると、もっとも重いもので400g、軽いもので3.0gを測り、平均重量は82gとなる。(挿図25)は石錘の重さの分布を完形品につき10gごとの値でグラフに表わしたものである。30～90gにかけて集中している。(参考……布勢遺跡すぐ近くの三浦遺跡《弥生》、桂見遺跡《縄文》で出土している石錘の重さのピークは60g前後である。)

石錘は從来土錘と同じく漁網錘として位置づけられている。布勢遺跡のすぐ近くの湖山池で投網を打っているらっしゃる森本為之氏によると、投網の場合投げる為壊れやすい土の錘りは全く使わず、鉛の錘りのみ(1個30gのものを180個つけ、フナ・コイを探る)が使われている。現在は鉛があるが、鉛以前は石などを使っていたのではなかろうかと思う。投網漁法のみに石錘が使われたと限定はできないが、投網のおもりの重さ(30g)とグラフの最初のピーク(20～50g)がほぼ似ている点、石製だから投げても頑丈な点でそう考えられる。従って石錘の重量変化によって漁業の規模や、さまざまな漁法が想像できる。⑫の小型石錘については、打ち欠きの糸かけ部分が磨滅している点から、実際に使用されたものと考えるが、どのように使われていたのかはわからない。

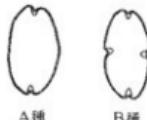
布勢遺跡も近くに湖山池、又日本海などがある点から、從来通り漁網錘として使われていたと考えられる。しかし、カゴが4体出土している事から考えて、渡辺誠氏が指摘されている如く、ただ単に漁網錘としてのみ使用されたのではなく、カゴを編む錘具としても使用されたと考えられないだろうか。(津川)

注1. 渡辺誠『縄文時代の漁業』雄山閣 1973

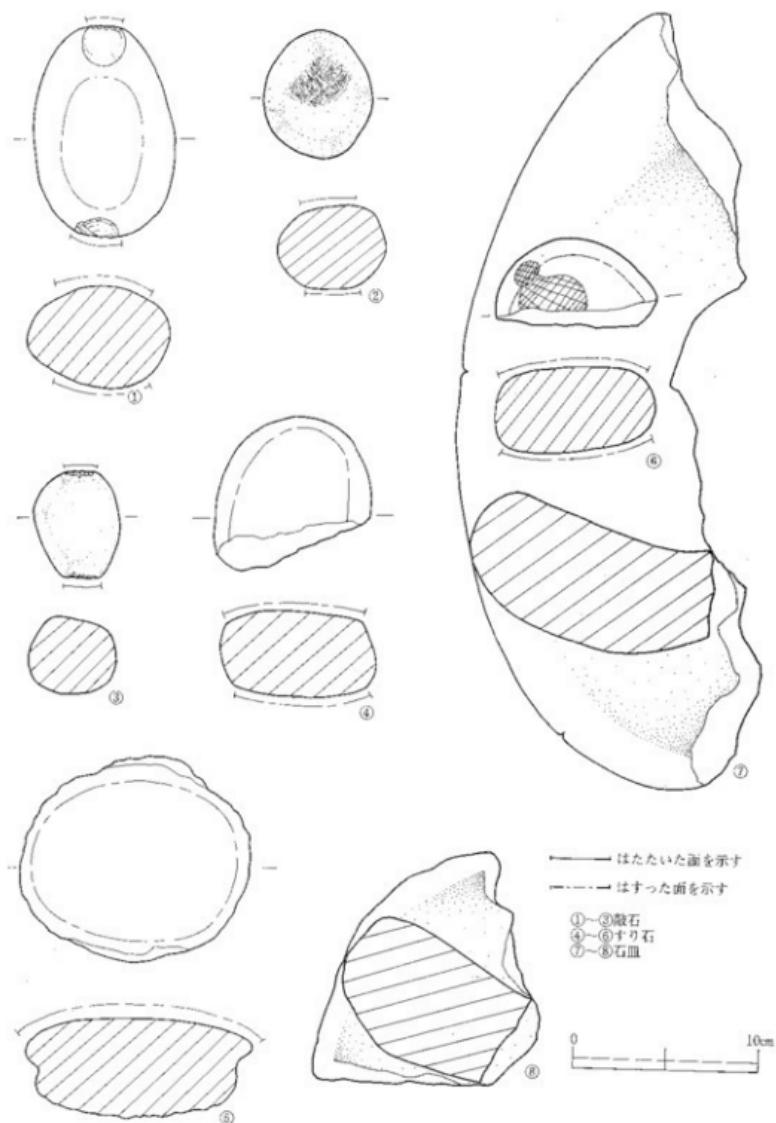
注2. 渡辺誠「スタレ状痕の研究」『物質文化』 1976



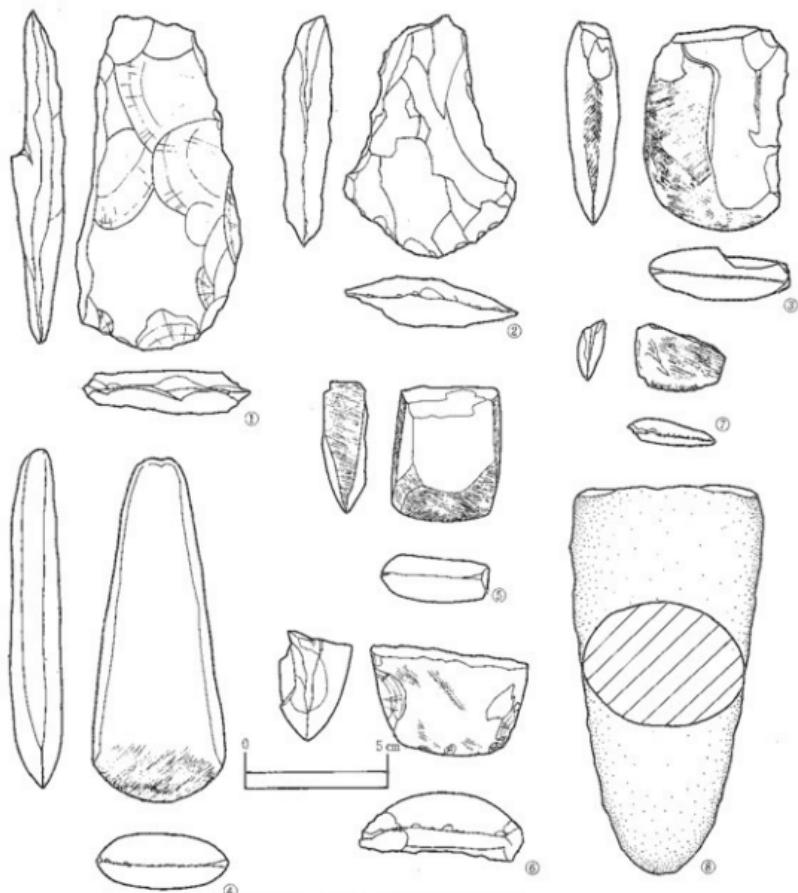
挿図25 石錘重量分布棒グラフ図



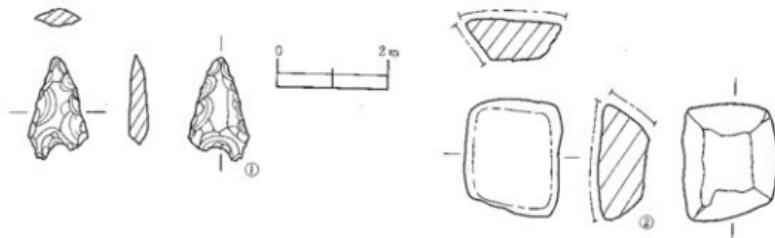
挿図26 石錘分類図



挿図27 嵌き石・すり石・石皿 実測図



挿図28 打製・磨製石斧実測図



挿図29 石鎚・砥石状磨製石器実測図

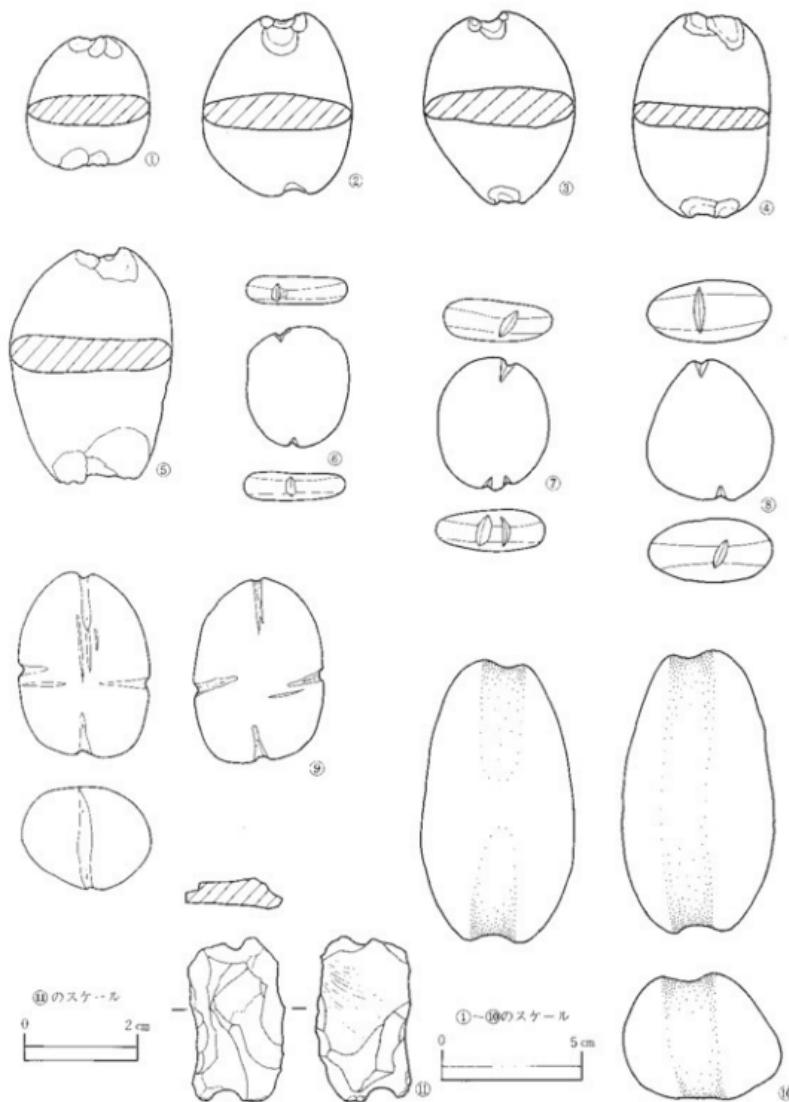


図30 石器実測図

### 3. 木製品

布勢第1遺跡より出土した木製品は、そのほとんどが縄文時代のもので、1点のみ中世に比定し得る包含層から確認された。

縄文時代に属する木製品は、調査されたグリッドのほぼ全域で検出されたが、原形の明確なものは全て12CNW I・IIIグリッドで出土し、杓子をはじめ木鉢、漆塗木器、櫂、石斧柄などである。

#### (1) 杓子 (挿図31-①、図版15-①、②、③)

身は平面が橢円形を呈し、口径は13~16cmである。底部は丸みを帯びており、柄は身と一体で先端には水平にリング状の取手がつく。外面の一部に擦消縄文のモチーフを思わせる凹線がみられる。材質はヤマグワ。

#### (2) 木鉢状木製品 (挿図31-②、③、④、図版15、16-④、⑤、⑥)

②は復元口径18cm、器高は9cm位と思われる。平面は円形を呈し、口径に比して器高がやや高いので椀の可能性も考えられる。材質はヤマグワか?。③は、現存長15.8cm、現存巾4cm、高さ4.5cm。底部内面の湾曲した部分が残っているが外面は焼けている。材質はスギ。④は、現存長11cm、現存巾7cm、厚さ1.3cm。胴部から口縁部にかけての一部と思われるが、口縁部がとび出しており杓子の可能性も考えられる。材質はスギ。

#### (3) 朱漆塗木器 (第33図、図版15)

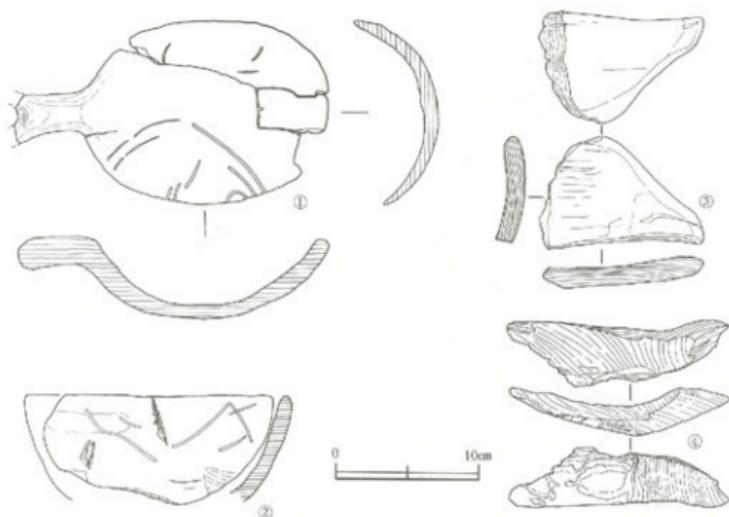
器形は判然としないが、片口を持つ鉢形木器と思われる。破片は半周分残っておりやや長円形を呈す。復元径約13cmを呈し、器高10cm前後と思われる。内面は全面に黒漆を塗る。外面はレリーフを施こし、黒漆を塗った後、凹部を残して朱漆を塗っている。文様は連続しないが、片口部分を境目にシンメトリーな文様を施したと考えられる。材質はトチノキ。

#### (4) 漆塗木器 (挿図32図、図版15)

現存長4.7cm、現存巾1.8cm、復元口径6.4cmを測る。内外面に黄褐色の漆を塗る。鼓形を呈し腕輪と思われる。中央部の穴は、繋合せるためのものであろう。材質はトチノキ。

#### (5) 櫂 (挿図34-①~⑥、図版16-①~④)、櫂柄状木製品 (挿図34-⑦、⑧、図版17-⑦、⑧)、櫂状木製品 (挿図34-⑨、⑩、図版17-⑨、⑩)、石斧柄状木製品 (挿図34-⑪、⑫、図版17-⑪、⑫)

①は、柄の一部に欠損がみられる他は完形である。全体に丁寧に仕上げられている。現存長103.3cm、身の最大巾6.8cmを測る。断面形は、先端部では扁平だが身の片面では凹面形をとり、身から柄へ移行する部分ではレンズ状を呈し、柄の部分はほぼ円形である。先端部分の稜は、杭に転用され砂面に打ち込まれた際に生じためこれが残っている。材質はスギ。②は、一部に欠損がみられるが完形に近い櫂である。丁寧に仕上げられているが1に比べやや厚手である。現存長80cm、身の最大巾6.4cm、厚さ約2cmを測る。断面形は、ほぼ全体にわたってレンズ状を呈すが、身の上部の片面は



挿図31 木製品実測図 1



挿図32 腕輪実測図

平担である。身の下部にはねじ  
れが認められる。この柾も①と  
同様杭に転用されていた。材質  
はスギ。③は、残存長35cm、巾  
6cm。④は、残存長29cm、巾5.4  
cm。⑤は、身の残存長50cm、巾  
6cm、身から柄の部位残存長31cmを測る。⑦は、グリップエンドで長さ14cm。⑩は先  
端部分と思われる。⑪はほぼ完成品で加工痕が残っており、⑫は未完成品である。

#### 柾状木製品（挿図35）

12C NW IIIより出土した。残存長125cm、身の巾6cmを測る。柄の一部と身の先端  
部を欠く。材質はヤマグワ。（中野）



挿図33 朱漆塗木器実測図

挿図35  
木製品実測図 3



①



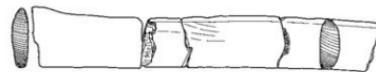
②



③



④



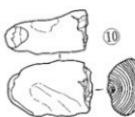
⑤



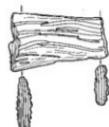
⑥



⑦



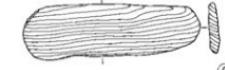
⑧



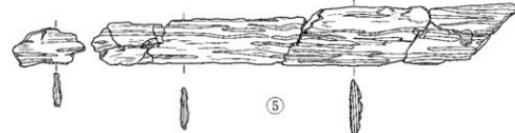
⑨



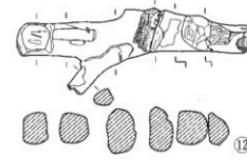
⑩



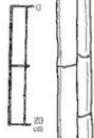
⑪



⑫



⑬



挿図34 木製品実測図 2

#### 4. 特殊製品（挿図36 図版18）

布勢第1遺跡の5ASE地区から、多量の後期縄文土器に混って土製品や不明品が出土した。耳栓・ひょうたん型土製品・かんざし形木製品がある。以下簡単に紹介する。

##### (1) 耳栓①

5ASE I内の第4層の黒灰褐色粘質砂層出土で、後期縄文土器を多量に出土している土層からである。形態は鼓形をしており、出土当初は鼓形器台のミニチュアかと思った程であった。耳栓の中では滑車状耳栓と呼ばれる形態にあたる。大きさは高さが1.1cm、径1.8cm、孔径0.3cmで、茶褐色をしているが、部分的に赤色顔料の塗られた痕跡がみられる。当時は全面に丹塗りがなされていたと思われる。布勢遺跡で耳栓が出土したのはこれが2例目で、十数年前に若林久雄氏により採集され、亀井熙人氏が報告されている<sup>注2</sup>。この他に県内出土の耳栓は、鳥取市大路川遺跡出土のものがある③。

##### (2) 垂飾土製品④

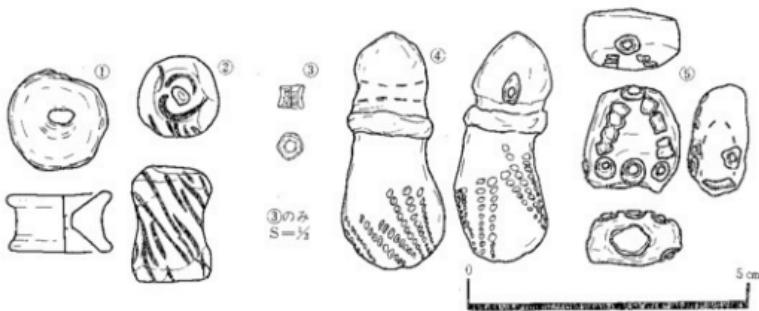
5ASE I内で、耳栓と同じ層から出土している。色が黒褐色で中央部がくびれ、くびれ上方にタガ状のものがめぐる。上部には紐を通すための孔が1つ開けられており、下部には $4 \times 5 - 3$ mmの穴がくぼんでいる。下部には、斜行縄文(R L)がみられ、上下の孔穴のまわりにわずかに丹がみられ、おそらく全体を赤く塗っていたと考えられる。このような例は他にはほとんどみられない。

##### (3) かんざし形木製品⑤

上の2つと同じグリッドの同じ層で、上の2つに比べてやや下層に位置する。大形の空豆くらいの大きさで横に大きな孔(直径0.8cm、深さ1.2cm)をもち、何かを挿入していたものと見られ、かんざし等の頭、柄部かと考えられるものである。全体を黒漆を塗った上に赤色顔料で色付けしている。また孔側に3個、両横に1個、頂部に1個の計5個の竹管文が彫り込まれており、金属器様の鋭利なものによると思われる穴があけられている。表面は竹管文の他、4個の穴が対になって掘られている。縄文時代のかんざしはすべて骨角器でできており、このような木製品で作られていたかどうか疑問が残るところだが、黒漆の上に丹塗りされている点、装飾具であることは誤りのないところと考えられる。（大谷）

注1. 『鳥取県史』原始・古代編 鳥取県 1972

注2. 『大路川遺跡調査概報』鳥取市教育委員会 1976



挿図36 特殊製品実測図 S-H

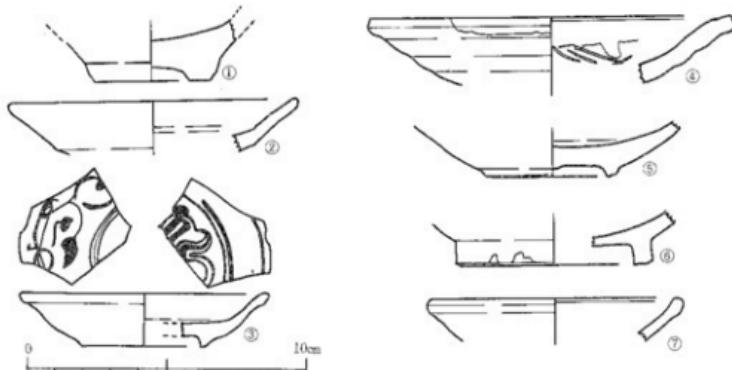
### 5. 中近世の陶磁器(挿図37、図版18)

中国産陶磁器と本邦産陶器がある。

中国産陶磁器には、青磁①②と染付③がある。青磁①は台部底部しか残っていないが、色調はうすい緑灰色。台部には微少な砂粒が付着している。11 ASEⅢ出土。②は皿の口端部であり、同じくうすい緑灰色。11 B'NE Ⅲ出土。染付③は青白色の素地に染付。外面はつたの葉様の文様である。内面の文様は不明。9 ASEⅠ出土。

本邦産陶器には、瀬戸系の灰釉陶器④と唐津焼と思われるもの（⑤・⑥・⑦）がある。

瀬戸系の灰釉陶器④はおろし皿で、口端部に緑茶色の釉がかかる。釉のかからない部分は青灰色。11 ASEⅢ出土。唐津焼と思われる⑤は内面に淡緑灰色の釉がかかるが、中央にドーナツ状に赤褐色の無釉部分がある。外面は釉をほどこしていない。⑥は碗の台部であり、内外面とも釉がかかり茶色がかかった紫色を呈す。台の内側は無釉。⑦は皿の口端部であるが、黒褐色の釉がかかる。⑤⑥⑦いずれも5 ASEⅠ出土。（坂本）



挿図37 中近世陶磁器実測図